
俺は魔人であいつは勇者で！？

h o z

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は魔人であいつは勇者で！？

【Nコード】

N1322Z

【作者名】

hoz

【あらすじ】

魔王が打ち倒され、魔王軍に所属していたおかげで、職を失ってしまった魔人のカイン。

魔王を打ち倒すために、来たはずなのに道に迷い、森の中で迷子になっていた勇者のシャル。

この二人の出会いが、世界におおきな変革をもたらすこととなる。

第1話 俺は二トでこれが始まりで！？

『勇者によって魔王は倒された』

普通なら物語の終わりを告げるはずのこの言葉、しかし俺にとっては違う、俺にとってはこれから新たな就職先を探すという何とも面倒な物語の始まりなわけだ。

俺の名前はカイン、何？ フルネーム？ そんなもん長すぎて忘れたとりあえずカイン、たった今職を失った哀れな魔人だ。おかげで俺の黒い瞳は死んだ魚のようになってる。

さっきまでの肩書きは34番目の魔王軍第三大隊隊長っていう無駄に豪華な肩書を持っていたわけだが今魔王が倒されたから魔王軍はこれで解散、よって新しい仕事を探さなきゃいかん訳だ。

お、俺の元部下が俺のところにきたみたいだ。

「隊長、これからどうしましょう？」

「おい、俺は隊長じゃない元隊長だ、そこんところ間違っなよ。これからどうするってどうしようもないだろ」

「ですよねえー、じゃあ自分は実家帰って畑仕事でも手伝おうかな」
「そうしろそうしろ、親孝行してこい」

さっきから俺のところにこうやって何人も相談しにきやがる、大変なのは俺もだっつーの。それにしても勇者もひどいもんだ、数千人の勇者が一斉に攻め込んできてどうやって、戦えってんだよ、魔王なんて、ただの金持ちの馬鹿か、歳とった爺さんがほとんどだっというのに、攻め込まれて勝てる訳ねえだろ。

最近の魔王はみんな魔王名乗って数ヶ月でくたばるから、魔王軍に入ったって全然稼げやしない、なんか人間の間じゃ魔王を打ち取った英雄は随分といい待遇を受けれるらしいから、血眼になって突撃してくるし、怖くて岩陰に隠れてるか死んだふりするのが関の山だ。

とりあえず城の宝物庫でも漁って何かもらって家帰るか。

と、思ってきてみたんだが勇者どもが宝奪い合って殺しあつてやる、うー、こわっこんなところ居られるかよ、さっさと逃げよう。

ここで俺は重大なミスをしちまうわけだ、何かつて？ こけたんだよ、それも盛大に。鎧を着てるせいでうるさいからすぐばれちまう。

まあ、魔王を倒せなくて少しでも稼ぎたい奴の前に魔王軍の元隊長が転がり込んできたんだ、向こうは手柄建てるチャンスだと思つて突撃してくるよなそりゃ、あははは……

あーこわっ、勇者こわっ、あれはもう勇者というより金と権力の亡者だろ。あんな鬼ごっこもう二度としたくない、てか、もう追いかけてきてないよね？ まだ追いかけて来てたら俺もう泣くよ？ いやマジで。

うん、とりあえずは大丈夫そうだ、こんな隊長マーク付いた鎧なんて着てるんじゃないかった、よしもう寄り道せずに帰ろう、まっすぐ帰ろう。

俺は黒い髪に着いた土を払い、立ち上がり岐路に着く。

歩くこと20分我が家にとっちゃーく、とはいっても家族もいな

いし別に特に何もすることないから、もう寝よう。

その日の夢で勇者どもに追いかけられる夢を見て、朝起きたら枕がぬれてた、泣くって言ったけど本当に泣くとは思わなかった。

さて、仕事探しに街でも行くか、おっと朝飯、朝飯。とりあえず俺はパンに何もつけずに食ってすぐに家を出た、今は仕事見つかるまで節約しないとな。

俺は職を探すために俺の家から歩いて5分ほどの街に来てみた、石畳の道に石造りの家屋、街頭には鉄塔の上に魔石がつけられているだけのシンプルなものだが夜にはそれなりに明るくなる。

それにしてもおかしい、街に昨日まであふれていた求人広告がすべて撤去されている、きつと風で飛んでっただよね、うんそうだよね。

とりあえず知り合いの店を回ってみたが、すべての店でもう働き手は足りてると言われたよ、やべーよ、このままだと俺餓死するよ？ マジで生きてけないよ？ しょうがないから森で何か仕留めてくるか、このままパンだけの生活っていうのもむなしし。

森の中に入ってもう1時間は経つが、いまだに猪一匹出てこない、木の実ばかり集まったけど、肉が食いたい！ 俺はベジタリアンじゃない！

それからしばらくさまよっていると、遠吠えが聞こえてきた。

もうその時の俺は肉が欲しくてたまらなかったから、もういつそのこと狼でも何でもいいと思って遠吠えの聞こえてきたほうへと駆けだしちまったんだ。いやはや、今思うと軽率だったもう少し考え

て行動すべきだった。

とにかく走っていると狼型の魔物が誰かを襲ってるのを見つけた。まいったんだよ、ここで見捨てるほど俺は開く人に慣れないわけで、すまん嘘だ、ただ肉を食いたかっただけだったと思う。

まあ、一応隊長なんてやってたんだそれなりには強いんだよ俺って、そこら辺の魔物風情に遅れなんかとらねえんだぜ。

ここで出すのは、俺の十八番、加圧魔法、こいつを使えば大抵のやつは動けなくなるし動けたとしてもかなり動きは鈍る、こいつを使って今まで逃げ延びてきたといっても過言ではない。当然大したことない魔物だから地面にへばりついて動けなくなるわけだ、さて、こいつらを持って帰る前に一つ感謝でもされておくか。

「おい、あんた大丈夫か？」

俺はさっきまで襲われていたやつを見ると、なんと女じゃねえか、しかもかなりかわいい、金髪碧眼ロングヘアー、来てる鎧は、まだ新しそうだ、腰には1メートルほどの両刃の直刀携え、背中には弓と箠えびら、こんだけの装備しててこんな魔物相手に苦戦してたのかよ、ずいぶん弱い奴だな。

俺なんて適当な麻の服だったのに、こいつより強いんじゃないのか？

「ありがとう、それにしてもすごい魔法ね」

そう言いながら、こっちに近づいてくるその女を見ていて何か違和感を覚える、なんていうんだろつかこれは、何かがおかしい。

「まあな、これでも魔王軍の隊長やってたんだぜ」

そういつて自慢げに笑った瞬間に、女の表情が変わり剣を振り上げる。

けど、振り上げすぎて後ろにこけやがった。

「だ、だましたわね」

さつきから、何かおかしいと思っていたがもしかしてこいつ……

「お前、勇者かつ!？」

「そうよ、この魔王の手下め、私が成敗してやる」

正確には元手下だ、ついで行っちまえばこいつには倒される気がしない、とりあえず加圧魔法つと。

「えいつ」

「きゃあ、ちよつとなによこれ」

ああ、やっぱり動けないか、なんだか見ててだんだんかわいそうになってきた。魔法といておくか。

魔法を解いてみたが立ち上がるうとしない、まさか今ので殺しちまったなんてことはないだろうな？　今まで数多くの戦場に立ってきたが殺したことがないことが自慢だった俺がまさか、こんなところで殺しちまったのか？

不安になって俺はその女に近づき様子を伺う。

「ひつく、うう〜」

あれ、もしかして泣いてる？

「あの〜」

「なによー、どうせ私は落ちこぼれのダメ勇者よ、魔物に襲われてるところを敵に助けられるようなダメダメ勇者よー」

ああ、泣いてるよ、完全に泣いてるようしようこのままだと完全に俺悪者だよ、でもここで殺されてあげるっていうのも変だし……えーっと。

「泣くなー!!」

「ひつく……うう……」

あ、泣き止んだっていうか、すごい我慢してる。

「いいか、俺だってすごいダメな魔人だった、でも今では隊長になれるくらいにまでなった、だからお前も変わる頑張れ!」

正確には隊長は狙われやすいから、くじ引きで負けたやつがなったんだけど嘘はついてない、だいたい俺この加圧魔法以外つかえないし。

「頑張る……」

うん、泣き止んでよかったこのまま帰ってこのことが知れたら、女泣かせた男として有名になっちまうところだったぜ。

「私、頑張って、魔王を倒す」

「あ、魔王ならもう打ち取られたよ」

しばしのあいだ、沈黙が続いた。

「えっ……！　じゃあ、あたしは何を目指して頑張ればいいのよ!？」

「知るかボケ、自分で考えろ!」

「もういい、帰る」

そう言って、女は歩き出したのだが……

「おい」

「なによ、もう帰るんだから放っておいてよ」

「いや、そっち行くと魔人の村だぞ」

再び沈黙

「お前、もしかして帰り道解らないのか？」

女はこくりと頷き、うつむいている。

あ、また泣きそうになってきた。

「案内して……」

「いや、人間の街のほうに行ったら俺狩られるから無理」

あ、目に涙たまってきた。

「えっと、とりあえず俺の家来るか？　えーと、名前は？」

「シャル……」

これがこいつとの出会いだ、何とも間抜けのこの勇者との出会いが俺の人生どころか世界を変えるきっかけになるなんて誰が思っただろうか、だれも思っわけねえよな……

第2話 俺は家主であいつは偉そうで!?

さて、シャルを俺の家につれてきたわけだが、なぜか我が物顔で椅子に座って足を組んでいやがる、なぜこいつはこんなに偉そうなのだろう、もっとこう、部屋の隅で体育座りでもしているのがふさわしいような状況だというのに。

「ちょっと、あんたの名前聞いてなかったわね、おしえなさいよ」

なぜ、こんなに高圧的なんだこのダメ勇者は？

「カインだよ」

「そつ、じゃあカイン、お茶出して」

なぜ、俺が命令されているのだろうか、確かに客人を招いたのだから茶の一つや二つ出すが、まあいいや、とりあえず出しておこう。

「はい、どうぞ」

シャルの目の前にティーカップに入れた紅茶を置くと、シャルは早速一口飲んですぐにカップを置いた。

「なにこれ？」

ん？ 虫でも入っていたのだろうか？ いやまさか俺に限ってそんなへまをやらかすわけがない。

「こんなまずい紅茶初めて飲んだわ」

「馬鹿言っな、家で一番高い紅茶だぞ」

なんてこった、客人用のうちで一番高いとはいっても、もう一種類しかないけど、とりあえずこれがまずいだと。

俺はティーポットから自分のカップに注ぎ一口飲んでみる。

うん、うまい茶葉の量、お湯の温度共に最適だったのがよくわかる、これがまずいのだったらいっぱいいたい今までどんな紅茶を飲んできたんだ？

「もういいわ、さっきので汗かいちゃったからお風呂貸して」

「その、扉の奥が風呂だお湯は沸かしてやるよ」

ここまで、言われても優しくする俺って寛大だな、いやほんと。

シャルは俺の指差した扉を開け、すぐに閉めた。

「何よ、あの狭くて汚いお風呂は！？」

「いや、普通だろ……」

「あれが普通だっていうの？ 見るからに貧乏そうな格好してると思ったら本当に貧乏人なのね、もういいから昼食の用意して」

さすがの寛大な俺もさすがにこれには頭に來たよ、もう怒った。

俺はシャルの襟をつかんで家の外に放り投げてやった。

「ちょっとなにするのよ！？」

「こんな貧乏人にかまわずどうぞさっさとお帰りください、ほら荷物」

そっいつて剣と弓と箆へらを投げて扉を閉めた。

「ちょっと入れなさいよ！」

そういいながらシャルが扉をたたいてくるが、もう無視だ、このまま夜の森で魔物にでも食われてしまえ。

それからしばらくの間扉をたたきながらシャルはギャーギャーわめいていたが、諦めたのか扉をたたく音も声も聞こえなくなった。少しばかり罪悪感はあるが、あんなことを言われてまで面倒を見てやるような理由などない、大体あいつは勇者なのだから、そこから死のうがあいつの責任だ。

それでも非情になりきれないのが俺ってやつで、少し心配になって扉を開けて外の様子を伺ってみる、

家の前にはいないようだがいったいどこに行ったのだろうか？

とりあえず俺は家を出て森の中へと歩きだした、決してシャルが心配だからじゃないぞ、食材探しだからな、間違うなよ！

森を歩くこと数分、適当に木の実を集めながら歩いていると、誰かがすすり泣く声が聞こえてきた。こっそりと近寄り見てみると、予想通りシャルが木の下で体育座りをして泣いていた。

「うう……ひつく……かえれないよ……」

もう反省しただろう、からそろそろ許してやるか。

「おい、シャル」

俺が話しかけると、シャルはあわてて涙をぬぐい赤くなった目で睨

んできた

「なによ、カインは敵なんだから話しかけないでよ」

面倒くさいやつだなこいつは。

「そうかいそうかい、俺は敵だから話しかけるなと。せつかく許してやろうと思って迎えに来たのにとんだ無駄骨だったな、じゃあな」

そういつて、俺が振り返り、家に帰るフリをするとシャルが慌て出す。

「ちょ、ちょっとまってよ」

「なんだ？ 敵の俺に用か？」

なんだかいじめるのが楽しくなってきた、もうしばらくいじめるとするか。

「いや、その」

「なんもないなら帰るぞ」

「ちよつと待ってって言うてるでしょ！」

「ならなんだよ？」

このままじゃ埒があかなそうだな、しょうがないからもうやめてやるか。

「あ、あんた私の仲間になりなさい！」

「は！？」

今こいつなんて言った？　もしかして俺の耳がおかしくなったのか？

「仲間なら何の問題もないから仲間になれって言ってるのよ」

またこいつはぶっ飛んだ発想を、開いた口がふさがらねえよ。

「勇者の仲間に魔人なんて聞いたことがねえぞ？」

「それは今までの勇者、私はそんな奴らとは違うの」

その弱さは確かのほかのやつらとは違うな。

「それで、仲間になるの？　ならないの？」

ここではないって言ったらまた面倒なことになるよな。

「はいはい、仲間になりますよ」

「ほ、ほんと？」

いって言われると思ってなかったのかこいつは？

「へーへー、ほんとです」

「じゃ、じゃあカインの家に行ってもいいの？」

だんだん目が輝いてきたなこいつ。

「仲間なんだからいんじゃないの？」

「そ、そうよね仲間だもんね」

「あ、でもあんまりわがままだったら仲間やめるから」

「わ、わかったわ気をつける」

こうして結局シャルは俺の家に帰ってきたわけだ。

「風呂入るか？」

「うん」

実に素直でよろしい。

「そうか、そのタオル使っていいぞ」

「のぞかないでよ」

「のぞかねえから早く行け」

まったく、そこまで俺は落ちぶれちゃいねえっての、さて、今のうちに買い物済ませてくるか。

買い物から帰ってきたがまだ、風呂から上がって来てはないみたいだ。俺は脱衣所の扉をノックする。

「なによ？」

「脱衣所に適当な着替えおいとくから」

「わかったわ」

俺は女の服などわからないから、適当に店で見繕ってもらったが大丈夫だろうか。とりあえず今のうちに飯でも作っておくか。

しばらくして、風呂から出てきたシャルは俺の置いておいた、青を基調としたワンピースを着て出てきた、特に文句は言わないからよかったんだとおこつ。

「ほれ、かなり遅いが昼飯だ」

「ありがとう」

そう言ってさらにパンとさっきの魔物の肉を焼いたものに果物で作ったソースをかけた料理を渡したら一切文句を言わずに食べた、さすがに魔物の肉は文句言うと思っただけだな。

夜になり、寝る場所が俺の使っていたベッド以外にないことに気付き、さすがにシャルを床で寝させるわけにもいかないなので、ベッドをシャルにやって俺は床の上で毛布にくるまって寝た。

次の日の朝、体がすごい痛かったが自分で招いた結果なのだからと我慢するでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1322z/>

俺は魔人であいつは勇者で！？

2011年12月5日09時11分発行